第8章

石川先生と品質管理

8.1　日本の工業製品の品質向上へのご貢献

先生の最大のご業績は品質管理の普及，発展に関するものであります．

品質管理技術は第二次大戦直後，米国から導入されたものでありますが，先生は以下に述べる活動を通じて，水野 滋，朝香鐵一，木暮正夫先生を始めとした同志の品質管理専門家とともに，わが国産業への普及をはかるとともに，日本の産業界に，より適した品質管理の体系をつくるための研究を進め，企業のトップマネジメントから現場の作業者にいたる全員参加の全社的品質管理(TQC)の体系を創案し，企業経営の理念およびその活動形態に革新的変化をもたらされました．

第二次大戦直後から現在まで，日本の産業の製品の品質は飛躍的に向上しました．品質管理活動がこれに大きく貢献していることは誰しも否定することのできない事実であり，現在，日本の品質管理は発展途上国はもとより，欧米先進国からも大きな関心を集めているところであります．

1948年秋，日科技連において，品質管理研究会が設置され，経済安定本部の依頼にもとづき統計的品質管理の調査研究を開始いたしました．そうして，この研究会の活動結果を基にして，第1回の「品質管理セミナー・ベーシックコース(略称，BC)」が1949年9月に開催されました．このコースが始まるととも

に，その教材，演習等の準備のための会合が毎月開かれるようになりました．この会合では，品質管理をより深く研究し，整理して広く産業界に普及させなくてはならないとの考えから，セミナーのことに留まらず，品質管理の実践による日本の産業の復興について討論されました．そんなことから，同年秋頃には，これらの会合に集まってくる人達は「品質管理リサーチグループ」(Quality Control Research Group, QCRG)と呼ばれるようになりました．石川先生はこれに参画し，米国から導入された統計的品質管理の調査研究に尽力されました．そうして，企業における品質管理活動は，一部の専門職によってのみ行われるべきものではなく，全階層，全部門で実施されなければならないという考えに基づき，QC リサーチグループの同志とともに，大変幅広い活動を精力的に行ってこられました．

石川先生は，品質管理に関する各種セミナー，すなわち，経営者，技術者，職組長，QC サークル，営業部門，購買部門などに向けた品質管理セミナーの開催を日科技連に提言，これを実現させるとともに，これらのセミナーを含む大部分の品質管理セミナーの運営委員長，運営委員，あるいは講師として，TQC の理論的構築と実現に大きな指導力を発揮されました．また，石川先生は，日本化学会であるいは日本短波放送，NHK ラジオ，NHK 教育テレビでの品質管理の講座も担当されました．(第 9 章参照)

さらに，TQC の実現の過程で，現場第一線作業者への品質管理の教育，普及のため「QC サークル」の結成を提唱され，雑誌『現場と QC』(後に『FQC』，さらに『QC サークル』と改題)の編集委員長を 1962 年の創刊時からご逝去されるまで務められるなど，その普及に多大の貢献をされました．(第 10 章参照)

先生は，品質管理の普及を目的として，日科技連において 1950 年から発行されている雑誌『品質管理』の編集委員長を 1952 年から 1978 年まで務められ，雑誌を通じての品質管理の普及にも尽力されております．『品質管理』誌の発行部数は約 1 万部となっております．

日科技連は，1950 年，51 年と来日し，日本の品質管理の指導に尽力した W. E. デミング博士の功績を記念して，日本の品質管理功労者，功労企業に対する表彰制度として「デミング賞」を設けましたが，先生は同委員会委員，同賞実

施賞小委員会副委員長として長年にわたって尽力され，適切な審査制度を確立されるとともに，品質管理に関する優れた業績の企業の表彰に尽力してこられました．これは日本の企業の品質管理のレベル向上に大きな効果をもたらすところとなっております．

先生は，品質管理普及のためには産・官・学間の相互啓発が重要であるとの観点から，1951年以降，日科技連主催による「品質管理大会(現在の部課長・スタッフ品質管理大会)」「品質管理春季大会」「職組長品質管理大会(現 管理・監督者品質管理大会)」「トップマネジメント品質管理大会」「全日本選抜QCサークル大会」などの品質管理大会の実現をはかっておられます．特に，「品質管理大会」では第1回から第11回まで委員長を務められました．

また，日本科学技術連盟，日本規格協会，日本商工会議所の共催による「品質月間」を毎年11月に実施することを提唱され，1960年の第1回品質月間以来，品質月間委員会の委員長として科学技術庁，通商産業省，その他関係各庁の後援を得て，月間行事の実施に尽力してこられました．

1965年には，産官学の協同の研究討論の場として「品質管理シンポジウム」の創設を主張され，これの実現をはかり，1978年まで水野 滋，朝香鐵一両先生とともに組織委員として尽力されました．このシンポジウムは，同年以来今日まで継続して開催され，日本の品質管理のレベルの向上に大きく貢献しております．

1971年，日本品質管理学会の設立にあたってはその準備委員として活躍され，また1971年から74年まで同学会副会長，1974年から1975年にかけては会長に選出され学会の基盤づくりに貢献されました．これらの功績により1982年名誉会員になられました．

また，1980年には，通商産業省原子力発電所品質保証検討委員会の委員長に任ぜられ，日本の原子力発電の稼働率向上に貢献されました．

先生はまた，品質管理に関する幅広い研究を進められ，多くの著書，論文にこの成果を発表しておられます．これらの著書の中で，『工場におけるサンプリング』他3編に対しては日本経済新聞社から日経品質管理文献賞が，『日本的品質管理』(日科技連出版社，1981)に対し社団法人日本経営協会から経営科学文

献賞が，それぞれ授与されております．（第15章，巻末年譜参照）

また，品質管理のインフラとしてのサンプリング研究（第13章），工業技術化の推進（第14章）にも貢献されました．

これらの国内におけるご活躍に加えて，国際的にも多大なご活躍をされました．（第11章ならびに第12章参照）

なお，初期のご業績に対して，デミング賞委員会からQCリサーチグループの一員として1952年にデミング賞本賞を授与されております．

注）本節は「石川 馨先生のプロフィール」（石川 馨先生叙勲記念会編）の記述をベースにして編集しました．この稿をまとめるに際して，渡辺英造氏から貴重なコメントを頂きました．

石川 馨博士の真価

J. M. Juran

石川博士と私との出会いは，1954年の夏，私が経団連と日科技連の招きで初めて日本を訪れたときでした．当時，博士は日科技連のQCリサーチグループのメンバーの一人として，世界的競争力を持つ日本の品質をつくることを目指して教育用の資料の作成や訓練コースの運営などの研究・普及活動を行っておられました．このリサーチグループは，前もって送った講義資料の翻訳から講演会の計画，運営，また企業指導などに積極的に協力してくれました．

この1954年からの35年間に，私は石川博士と，日本ばかりでなく世界中のいろいろな国で会い，また一緒に仕事をする機会に恵まれました．その間に博士は，日本の品質革命の設計者として大きく成長されました．石川博士は日本の品質，のちには世界中の品質を改良する使命に献身することを通して，その指導者としての地位を得たのです．そして，その献身は驚くべき結果を生んだのです．

石川博士は広範囲にわたって執筆・編集を行っています．発行されたそれら出版物の中には，品質に関する貴重な書物，論文が含まれています．それらの

外国語への翻訳語版も膨大な数が出版されています．

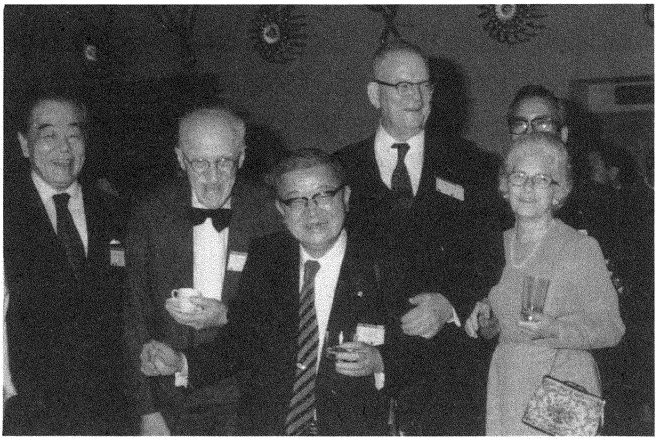
石川博士は，日本のマネジャー，エンジニア，ワーカーばかりでなく，外国のマネジャーも含めて，二世代にわたる教育に幅広く貢献されました．また，国内的にも国際的にも標準化委員会の活動に大きな足跡を残されました．

博士はさらに，QCサークルの理念や特性要因図を含む革新的な数多くのアイデアを提供しています．

博士のこのような貢献に対して外国では，石川博士を卓越した日本の品質全権大使と呼んでいます．石川博士がその生涯の間にどのようにしてこれほど多くのことを処理することができたのかの研究から得られることはたくさんあると思います．私の観察では，博士は自分の天分を最も上手な方法で利用することでそれをなし遂げたのです．つまり博士自身のためより，常に社会のために貢献し，常に穏やかな言動によって多くの人の協力を引き出し，また事実を確認し，これを厳密に分析するという彼の教義を貫いたのです．博士は常に真面目であり，それが他人の心からの信頼を獲ち得たのです．

石川博士のご逝去に対して，私は日本の方々とともに悲しみをわかちあいたいと思います．私は博士と一緒に仕事をすることが好きでした．博士の存命中，ずっと彼の友人であり続けたことを誇りに思っています．博士の世界の品質に対する多くの貢献ならびに社会に対する献身に対して心からの敬意を表するものです．

（Juran Institute, Inc. 名誉会長）



ICQC '87-TOKYOにて，高木東大名誉教授，ジュラン博士，デミング博士夫妻とともに（1987年）

石川先生から学んだこと

久米　豊

石川先生があまりにも偉大な存在であったことは万人の認めるところでありますが，日産自動車，また私にとりましても忘れることのできない人でありました．思い起こすと，私と石川先生との出会いは遠くて古いものであります．

1959年，当社は貿易自由化の進展，また米国向けの輸出の本格化といった課題を抱え，これらの課題を乗り越えるために，さらには将来への体質作りの一貫として全社的品質管理を導入し，デミング賞にチャレンジする決意をしました．当時私は本社工場(現在の横浜工場)の生産部日程課長であり，川又社長より活動の推進役を命ぜられ，石川先生に直接指導を戴きながら進めました．この思い出の一つとして，先生より「デミング賞のためだけなら，やらない方がよい．」と言われたことは今でも記憶しています．その後も折にふれ先生のご指導を戴き，特に最近，社内の役員・部次長に対する品質管理研修においては，企画から実施にいたるまで大変お世話になりました．

このような経緯により，社内には先生の謦咳に接した者は大変多いのですが，先生の教えが現在どう活かされているかの一端に触れてみます．

私は数年前に企業理念を定めました．ねらいは全社員の意識を改革し，求心力を高めることにありました．この骨子は常に「お客さまの満足を第一義とする」ことにあります．これはまさに品質管理の真髄であり，先生から幾度となく教えられておりましたが，なかなか地についたものにならなかったと反省しております．しかし，この理念を徹底的に各部門・各階層に浸透させたことにより，最近では社外の人から「日産は変わった」と言われることも多く，ようやく本物になってきたと思っております．

以上，石川先生の思い出の一端を回顧しましたが，今後とも先生の教えをさらに活かし，リーディングカンパニーとして頑張っていきたいと念願しています．

(日産自動車取締役社長)

石川 馨先生を偲ぶ

豊 田 章一郎

石川先生の突然のご逝去に対し，心からお悔み申し上げます．1989年の正月，石川先生の勲二等瑞宝章のご受章を皆さまとともにお祝い申し上げ，お元気なご様子を拝見させていただきましたのが，先生とお会いした最後となってしまいました．

その折，いただいた先生の著書『品質管理入門』の序言に，「新しい品質管理は，経営の一つの思想革命である．新しい品質管理を全社的に実行すれば，企業の体質改善ができる．……」と先生が日頃おっしゃっておられたご主張が載せられております．この信念にしたがって，日本の品質管理の発展に尽くされた先生のご功績は今さら申すまでもありませんが，先生は日本の品質管理について，積極的に問題意識をお持ちになり，折にふれてわれわれをご教導くださいました．先生のこのようなリーダーシップの大きさを思います時に，もうこうした機会が二度となくなったことがまことに残念でなりません．

先生のご指導をいただいた会社は，品質管理を実践することにより，企業体質改善の実をあげ，その製品の国際的な競争力を高め，今日の日本経済の基盤を固めてまいりました．その実績は，わが国のみならず世界各国の企業の注目を集めるところとなっております．先生の品質管理の“実行”を強調された教育は，国際的にも強い共感を持って迎えられております．

私どもは，そうした意味で「QCは教育に始まって，教育で終わる」という先生のお教えを，これからも忘れることなく，品質管理の一層の発展に努力していきたいと思います．

先生の御霊のやすらかならんことをお祈りし，先生を偲ぶことばのむすびといたします．

（トヨタ自動車取締役社長）

先生にお勧め頂いたTQC，今日のブリヂストンを形成

石　橋　幹一郎

今の日本は世界一のすぐれた工業技術をもっております．しかし1950年頃の水準はまったくおくれにおくれた技術だけでした．そこから生産される製品の品質は不揃いで粗悪品そのものでした．

使えばすぐにこわれるし，直してくれない品物ばかりでした．

しかし日本人は何とかして乏しい資源の国ながらも立派に国を立ててゆかねばなりませんでした．

そのころ，石川先生はアメリカで創案されたTQC総合的品質管理の手法を，これこそ日本を救う道だとされて率先して導入されたばかりでなく，アメリカ人のはるかに及ばない高度の品質管理の体系を作り上げ普及に努められました．特に有名なQCサークルのシステムは石川先生のご発意ときいており，これが絶大な力を発揮しました．

1964年，私は43歳の社長として，社内の思想を統一し，ベクトルを合せるため，TQCを石川先生の熱心なおすすめにより導入し，今日のブリヂストンを形成することができました．心から感謝しております．

（ブリヂストン取締役名誉会長）

「社長が先頭に立たぬQCは成功しない」

宍道一郎

石川先生のご指導を受けたのは，ついこの間のように思われますが，もう4半世紀も昔のこととなりました．正に烏兎匆々の感を深くするのであります．

当時のある年，日科技連の品質月間スローガンに「製品の品質を良くして大いに輸出を伸ばそう」という意味のことが掲げられました．当時は外貨が不足していて，アメリカがくしゃみをすれば日本が風邪を引くと言われた時代でした．品質の良い製品を作れば，世界中の人が買ってくれるという真理をどう実現するか．これを皆で工夫し，切磋琢磨しようという品質管理関係者の率直な努力目標を表現したものでした．

「QCは，担当者任せでなく社長が自ら先頭に立ってQCを勉強しようと決心して始めるのでなくては成功しない」

これは私が品質管理部長としてデミング賞を狙って自社にQCを持込みたいと思い，石川先生に初めてお会いした時に，先生が冒頭に言われた言葉でした．

後に水野先生を団長とする5 QCTに参加して欧米のトップ企業を40日間に亙って訪問し，見学並びに意見交換をする機会を得ました．訪問した先は，何れも当時世界に冠たる大企業でしたが，彼等のQCには，石川先生が言われたTQCの思想はカケラ程も見当たりませんでした．

今日では日本が世界の経済大国となって欧米先進国と貿易摩擦を惹き起こしていますが，石川先生をはじめ諸先生方が創出された「社長が先頭に立つQC」「企業の総力を挙げ，全員で努力するQC」を日本の企業が実践したお蔭であると，しみじみ思うのであります．

（日本ビクター特別客員，同社元会長）

8.2 石川 馨先生と日科技連グループ

石川先生と日本科学技術連盟との関係は，8.1節に述べましたように先生がQCリサーチグループ(略称QCRG)の活動に参加されたことから始まります．

1952年のデミング賞は，石川先生を含む8名のQCRGのメンバーが受賞されていますが，その選考理由書には以下の記載があり，日本の品質管理の活動が，QCRGの活動によって形成されていった経緯が述べられています．

「水野滋，朝香鐵一，後藤正夫，東秀彦，石川 馨，木暮正夫，三浦新，渡辺英造の8氏は昭和23年末以降，協力して統計的品質管理の研究を行い，その結果，品質管理教育コース体系を確立して教育普及啓蒙に努力し，わが国の主要産業への統計的品質管理の導入実施に対する寄与貢献は極めて偉大であった．昭和23年の当時は品質管理に関する文献の入手も困難であったが，本グループの一部によりわが国品質管理界の重大事の一たるアメリカ規格の翻訳が完成された．次いで昭和24年より開講された日本科学技術連盟の品質管理セミナーの第1回以来，水野滋氏を中心として本グループが一体となって協力し，各々専門業務の余暇を割いて教育に努力した．このセミナーが今日わが国の最も権威ある品質管理教育機関であることは疑いをいれぬところであり，同セミナー出身者が今日産業界にあって品質管理実施の先鋒であることは衆目の見るところである．かかる功績は本グループの努力によるものであることは申すまでもない．

本グループが過去3年有余に亘って活動した分野は極めて広範である．即ち，日本科学技術連盟における教育活動を始め，わが国における品質管理に多少共関係ある学協会，産業団体，会社事業所，大学，官庁において直接あるいは間接に指導を受けざる所皆無と申しても過言ではない．

本グループは品質管理唯一の指導月刊誌『品質管理』の編集主力メンバーである．また，本グループを主力執筆者とする『品質管理教程』が近く公刊せられることになっている．

統計的品質管理は包括する分野が広範で多岐に亘るので，いかに優秀な学者技術者でも一人の力のみでその推進を計ることは不可能であるが，各方面の専門家よりなる本グループが水野滋氏を中心として密接な協力によって始めてかかる大事業を完遂し得たものである．」(原文のまま)

石川先生は，産業界の発展のために，QCの啓蒙，普及，発展の推進を図り，QC活動をたゆみなく進められ，ついには日本的品質管理を大成されました．先

生について特筆されるべきことは，品質管理技術の専門家にとどまらず，多くの人々を巻き込んで全国的品質管理運動を展開したオーガナイザーであったということであります．

日科技連グループにおける先生の活動業績は次のとおりです．

(1) QCの仲間づくりと指導者の育成：品質管理セミナー・ベーシックコースの実行機関である部会活動，二人講師制の推進．

(2) QC手法の活用：BC班別研究会，企業のQC指導．

(3) 階層別品質管理セミナーの開催：ベーシックコース→部課長コース→重役特別コース→経営幹部特別コース→職組長基礎コース．

(4) 教育訓練の横の拡大：営業部門，購買部門のQCセミナー．

(5) 企業への普及：『品質管理』誌，『現場とQC』誌，品質月間行事，出版，英文レポート，講演．

(6) 自己啓発・相互啓発：QCサークル活動，QCサークルシンポジウム，各種QC大会，QCサークル洋上大学．

(7) QCの質的向上，変化への対応：品質管理シンポジウム．

(8) QC手法の拡大：実験計画法セミナー，実験計画法入門コース．

(9) 表彰制度：デミング賞，日本品質管理賞，石川賞，SQC賞，FQC賞(現在のQCサークル石川 馨賞)，日経品質管理文献賞．

(10) 国際交流・国際協力：海外視察チーム，海外研修者セミナー，講演，ICQC(品質管理国際会議)，ICQCC(国際QCサークル大会)．

(11) 石川賞：審査委員．

(12) 出版事業への協力：各種出版物の著者・監修者，編集委員長，アドバイザー．

なお，石川先生には，日科技連理事として1971年6月から，また日科技連出版社取締役として1976年2月から，いずれもご逝去されるまで，ご指導とご協力をいただきました．

（相馬義人）

石川 馨先生と日科技連

鈴 江 康 平

石川 馨先生の品質管理界における偉大な足跡については多くの方々が寄稿されると思いますので，私は日科技連と先生とのかかわりを記したいと思います．

石川 馨先生には逝去されるまで16年間に及んで非常勤の理事をお願いしておりました．しかしご尊父の石川一郎先生には，1946年5月，連盟が創立された当初から会長を引き受けていただき，1970年，先生が逝去されるまで続けて下さいましたので，連盟と石川家とのご縁は長く，父子二代にわたって大変お世話になりました．連盟は石川会長を顕彰するため石川家のご了承を得て石川賞を制定し，産業の近代化を推進した経営工学上の創意に対しての賞を贈っておりますが，既に19年に及んでおります．

石川 馨先生はご承知のとおり大学でのご専攻は燃料工学でありますが，品質管理との出会いは，ご尊父から連盟で始めた品質管理の話を聞かれたことにあるようです．このことは連盟第4代理事長勝田雄次郎氏から聞かされた話ですが，石川会長から頼まれて馨先生が連盟内の品質管理研究グループに参加するようお世話したとのことです．1952年には水野滋博士らとグループで第2回デミング賞を受けられましたが，以後品質管理の発展に多くの貢献をされたことは皆様ご存じのとおりです．連盟としましても，QCサークル，軽井沢の重役特別コース，雑誌『QCサークル』等多くの事業について創始者として，あるいは責任者として心血を注いで尽力していただいたことは感謝に耐えない次第です．先生は国際人として幅広く活躍され海外にも多くの知己を持っておられます．連盟が主催する品質管理国際会議やQCサークル国際大会等が成功してきたことも馨先生のお陰であると思っております．馨先生のご逝去は連盟にとりまして大きな損失でありますが，今後先生が拓かれた途をさらに発展させることが連盟の責務であると思っております．

（日本科学技術連盟理事長）

8.3 雑誌『品質管理』の育ての親

雑誌『品質管理』は，後藤正夫先生を編集委員長として，1950年3月にStatistical Quality Control, Vol. 1, No. 1として，日科技連から創刊され，現在もTQCの情報誌として広く活用されています．日本のQCの啓蒙期から時代の変化に対応しながら発展していく歴史を検証できる唯一の雑誌でもあります．この雑誌の前身は，1949年9月から始まった日科技連品質管理ベーシックコースの月報に端を発します．石川先生は，この雑誌の創刊2年後の1952年から1978年まで26年間に亘って編集委員長の重責を果たされました．その後も編集顧問として大所高所からご指導頂きました．(第9章1節(1)参照)

この雑誌の創刊時の編集陣容は，指導　石川一郎(以降敬称を略す)，編集顧問　井上春成(通産省工業技術庁　長官)，大内兵衛(東大名誉教授，総理府統計委員会　委員長)，亀山直人(東大教授，日本学術会議会長)，加藤威夫(三菱電機　取締役)，小林宏治(日本電気　取締役)，山内二郎(東大教授)など，編集委員には大来佐武郎(経済安定本部　官房調査課長)，河田龍夫(東工大教授)，茅野 健(電気通信省通信研究所器材実用化部　管理課長)，北川敏男(九大教授)，木暮正夫(東工大助教授)，増山元三郎(運輸技官，東大講師)，森口繁一(東大助教授)らがおられ，幹事長には後藤正夫(総理府統計委員会事務局，審査第二課長)，幹事に水野 滋(東工大助教授)，三浦 新(三井化学工業，調査部)，坂元平八(神戸大)，西堀栄三郎(日本科学技術連盟　参与)，東 秀彦(通産省工業技術庁　技官)，渡辺英造(大平鉱業研究所金属第一課長)など，今日からみれば政府，学会，産業界から集まられ，わが国の各界の指導的立場におられた，錚々たるメンバーで編成されていました．その中にあって石川先生は副幹事長を務められていました．

“創刊の言葉”として，日科技連会長　石川一郎氏(石川 馨先生の父上で当時の経団連会長)は，まず，

「(1) 平和国家，文化国家，民主国家の建設が我が国再建の不動の指針であり国是でもある．

(2) 質的水準を向上させて，もって世界市場における我が国の製品が堂々と競争に耐え得るようにしなければならない．

(3) 生産過程における統計的並びに技術的な品質管理の面から原単位の引下げや品質の向上と均一性の保持を進めて行く事が最も有効な方法である．

(4) 官，民，学の先覚的専門家のほとんど全部のご協力により品質管理に関するゼミナールを開催したが参加申込が多くその衆望に添うため本誌を刊行する．」

と創刊の由来を述べられ，

「(5) 従って本誌は，高級の理論の解説はもとよりであるが，品質管理に関する啓蒙と実際の手引きを使命とするものであって，理論と共に実行するという点を主旨として，まず応用方面で手近なものから品質管理の実際に入って，漸次この部門に対する経営者や技術者ならびに従業員の関心を高めてこれによって根本的に企業の合理化を促進する基礎を作って行きたいと思うのである．」

と編集方針を述べておられます．さらに，今後の品質管理の在り方について，第1回品質管理セミナー・ベーシックコースの実施の過程で参加者から寄せられた声などを踏まえて，次のように述べておられます．

「(6) 導入にあたっては，人間的要素を考え，日本的方式を開発すべきである．」

以上の『品質管理』誌の創刊の由来，編集方針ならびに今後の品質管理のあり方がその後の日本の品質管理の発展の方向を決めていったものと考えられます．その後の本誌の編集を見ますと，

① 品質管理の発展に伴い“品質管理”誌は絶えず最新の情報を品質管理にたずさわる人々に提供すべく努めてきました．

② 産業界と学界の協力体制のもとにすすめてきました．

③ 理論とともにと言うよりも実際的に役立つということをめざしてやってきました．

④ 品質管理の専門家のみならず，経営者，管理者，一般技術者，さらには，現場の作業者にも関心を持って貰えるように努めてきました．特に，現場の作業者向けのQCサークルは，後に述べますように本誌が母体となって生まれました．

というように，概ねこの方針に則って進められてきました．また，今日まで

の日本の品質管理の発展を見ましても，日本的芳香の醸成に重点がおかれ，今日，“日本的品質管理”として確立されるまでに至っており，ほぼこの方針に則ってきたと見ることが出来ます．大胆な推論が許されるならば，石川 馨先生は，その後の活動を進める際に常に父上の上記の方針が念頭にあったと見ることも出来ます．

1952年に後藤正夫先生より編集委員会委員長を引き継がれた後，石川先生は，本誌が日本の品質管理のリーダーシップを取るべく尽力されてきました．例えば，1950年末にわが国の経済にとって大きな課題となってきました“貿易の自由化”に対しても，“貿易自由化には品質管理で”という有名なスローガンを掲げて，どちらかというと防御的に捉えがちである産業界に対して前向きに対処すべく努められました．また，1960年には，「TQC連載講座“みんなでやる品質管理”」を掲載し，統計的品質管理(SQC)からTQCへの先鞭をつけるとともに，その方向についてリーダーシップを発揮されました．

先生は編集委員長としての役割のほか，ご自身でもサンプリング，工程解析，管理図法などの手法，品質保証，それぞれの時代のQCの方向づけ，時代の変化に対応するQCのあり方，QCサークル活動，国際化の問題，消費者問題に関する論文等々38年間に262編にのぼる論文をこの雑誌に掲載されています．先生のQCに関する思想，哲学がこの雑誌を通じて紹介され，日本のQC界に影響を与えました．

石川先生は，経営者や技術屋だけが品質管理を知っていても，現場の人達が品質管理を知らなくてはだめだという考えにもとづいて，1960年代に入るとともに，現場向けのテキストの出版や本誌における現場向け座談会の掲載などを積極的に行ってきましたが，それらに対する反応の強さを見て，石川先生は，“現場の人がそれだけ関心を持っているのなら雑誌もつくろう．”と言い出され，早速『品質管理』誌の編集委員が，1962年4月から年4回，『現場とQC』誌(現『QCサークル』誌)を刊行することになりました．このようにQCサークルの母体となった『現場とQC』誌も，『品質管理』誌から生まれました．(第10章1節，2節参照)

今日，『品質管理』誌はSQC誌からTQC誌と呼ばれるまで発展してきました

が，この呼び名の発展に石川先生を始めとした編集委員を母体とする品質管理指導者の尽力を見ることができます．

さらに，編集委員長として単に雑誌を発行する責任者に留まらず，編集の企画や委員会での討論などを通じて数多くの優れたQC指導者を育成されましたことも，忘れることの出来ない功績です．　（草場郁郎，小浦孝三，狩野紀昭）

『品質管理』誌の誕生のころ

後　藤　正　夫

品質管理を推進するパイオニアとなった8人のグループ(水野 滋，朝香鐵一，石川 馨，木暮正夫，後藤正夫，東 秀彦，三浦 新，渡辺英造)が品質管理推進の行動を起こしたのは1949年で，資源に乏しい日本が生き残るためには，品質で諸外国との競争に勝たなければならないという信念によるものでした．そしてその年の夏には日科技連を拠点として，SQCのベーシックコースのセミナーの開設の準備を始めていました．当時の日科技連の会長は昭和電工社長で日本産業協議会(経団連の前身で通称は日産協)会長をされていた石川一郎氏で，品質管理に大きな期待をされており，ご子息の馨さんがこのリサーチグループに参加されていることを，大変喜んでおられました．

ベーシックコースがスタートすると間もなく，「品質管理」の月刊誌を出すことの検討が始められました．この検討にあたっては，経営上のリスクに耐えられるかどうか等について論議が行なわれ，かなりの慎重論もありましたが，専務理事の小柳賢一さんをはじめ，私たちリサーチグループは強引に計画を進めることに踏み切りました．そして私が初代の編集委員長をつとめることになり，石川さん，水野さんをはじめとするリサーチグループが一丸となって準備に入りました．その際，特にこの『品質管理』誌に掲載する論文，報告等の内容を質の高いものとすることについて，後日2代目の編集委員長を長い期間にわたって務められた石川さんに特別のご努力をいただき，この計画を推進する牽引力と

なっていただきました.

私は編集委員長として，品質管理の名称にふさわしい品質のものにしなければならない．そのためには全体のデザインは5年，10年の後までも飽きることのないようなものにすること，最高の品質の紙を使用すること，単価が高くなっても原則として広告を載せないこと，現代かなづかいで統一すること，等々の方針を決めました.

しかし，この方針を貫徹するためには予想以上の時間と労力がかかり，委員長の私は石川さんをはじめとするリサーチグループの方々に，そして事務局の仁木正一郎さんと，大阪商船ビルの3階の冷えきった寒い部屋で，連日のように夜9時過ぎまで仕事を続け，間もなく編集事務の経験のある光明春子さんが事務局に入られて，作業はかなりスピードアップされました．本当にきつい仕事でしたが，近くの店との特約で運ばれてくる熱いカレーライスを食べるときばかりは，疲れも忘れてみんな集まって，品質管理の発展に託する夢を語り合いました．あのとき私たちを鼓舞激励して下さった石川さんのファイトを今も忘れることができません.

『品質管理』誌は購読者1000を目標に発刊しましたが，当時の購読数は500そこそこでした．広告を掲載しないので広告料の収入がないうえに，高価な上質紙を使用していたのでコストは当然高くなり，200円の定価は当時のサラリーマンの給与水準ではかなり高価なものでした．したがって主として企業の購入に期待しなければなりませんでしたが，まだ品質管理に関心をもたれている企業が少なかったこともあって，目標の1000部になるのにはかなりの時間がかかりました.

今日のわが国の経済の高い国際的水準は，企業経営者や多くの組織の管理者に，新しい希望と目標を与えた全社的品質管理によってもたらされたものであると思います．『品質管理』誌をはじめ，多くの品質管理に関する出版物を執筆あるいは編纂され，常に抜群の情熱をもって全社的品質管理を推進された石川馨さんの偉大な業績に対し，あの『品質管理』誌の創刊にあたって，先生とともに苦労した当時を偲びつつ，心から感謝の念を捧げたいと思います.

（参議院議員，元法務大臣）

『品質管理』誌創刊の頃

三　浦　　新

月刊誌『品質管理』(Statistical Quality Control)が創刊されたのは1950年3月であります.

当時，日科技連専務理事小柳賢一氏が1949年から非常に苦労してここまでもってこられました．日科技連が東京駅八重洲口の大阪商船ビルの3階にあった頃です.

通産省工業技術庁長官井上春成氏を日科技連におよびして月刊誌創刊のことを説明した時には井上さんは時機尚早であるといって賛成されなかったのです．しかし小柳さんの決断力でやろうということになって，1号を3月に出したのです．編集幹事長は後藤正夫さん(総理府統計委員会審査第二課長)，副幹事長が石川 馨さん，この時から私は石川さんとQC誌の仕事をご一緒にやることになりました.

創刊号を開いて見ると創刊のことば(石川一郎)，創刊に寄せて(大内兵衛)，工業経営とQC(小柳賢一)，これからの技術者のありかた(西堀栄三郎)，その他，宮城精吉氏の実施例，硫安のQC(三菱化成　中井伸爾)，QC講義(渡辺英造，三浦 新，水野 滋等)，立派なすべり出しをしました．石川さんと私とはこの頃から1989年なくなられるまで，40年間の長いおつき合いです．まだまだ続くものと信じていたのにたいへん残念です.

石川さんとは海外旅行，日本国内の見学旅行，調査，指導，ゴルフ等々思い出せば沢山あります.

年齢の順から言えばまだまだの人が亡くなってしまった感じです.

(元玉川大学教授)

8.4 デミング賞の発展にリーダーシップを発揮

日科技連は，1950年，1951年と来日し，日本の品質管理の指導に尽力されたW. E. デミング博士の功績を記念して，1951年に品質管理功労者，功労企業に対する表彰制度として「デミング賞」を設けました．

デミング賞には，

「統計的手法を活用した全社的品質管理またはそれに利用される統計的手法等の研究または普及に関し優れた業績のあった個人に授与されるデミング賞本賞と統計的手法等を活用した全社的品質管理を実施して顕著な業績の向上が認められる企業または事業部に授与されるデミング賞実施賞ならびに全社的品質管理を指向してそれに基づいて品質管理を実施して顕著な業績の向上が認められる企業の事業所を表彰するデミング賞事業所表彰があります」（デミング賞のしおり）．

この外に，デミング賞委員会が付託されている賞には，日本品質管理賞と日経品質管理文献賞があります．

石川先生は，1952年にQCリサーチグループ8名の一員としてデミング賞本賞を受賞されました．また，デミング賞委員会が日本経済新聞社の協力を得て行っている日経品質管理文献賞の受賞は，この賞の第1回目に当たる1954年の『工場におけるサンプリング』（丸善発行）に対する受賞に始まり，計4回にのぼっております．

デミング賞創設の経緯は，創設時のデミング賞委員会事務報告に次のように記録されています．

「デミング賞は，1950年7月～9月に日本の国勢調査における抽出速報調査の実施を指導のため当時の連合軍総司令部経済科学局（GHQ ESS）への助言者として来日された，米国予算局顧問W. エドワーヅ・デミング博士が，日本科学技術連盟の乞をいれ，8月13日から神田医師会館でいわゆる品質管理の8 days courseを与えられ，わが国の品質管理界に対して画期的な影響を与えられた．博士のこの講義は，英和両文の速記録をとってこれを整理いたし，“Dr. Deming's Lectures on Statistical Control of Quality”として有料配布をしたのであったが，この講

義録の印税は，博士から専務理事小柳賢一に寄贈いたされたのであった．小柳は博士の好意に感激し，日本科学技術連盟の役員会に図りこの講義録の印税ならびにその益をあげて基金とし，デミング賞の設定を発表した．すなわちデミング賞は，日本科学技術連盟の理事会の決議により，

1．Dr. W. Edwards Deming の好意と功績を記念し，

2．日本の品質管理の推進と発展に寄与する為に，

3．毎年1回，統計的品質管理の理論，応用の研究，教育ならびにその功績者を選んで授賞する．

4．又実施賞を設けて，会社工場で統計的品質管理の応用実施をして，顕著な成績を収めたものの中から選考の上これを授賞する．」（原文のまま）

デミング賞は，当時経団連の会長であり，日科技連の会長をされていた石川一郎氏（石川 馨先生の父君）のご尽力によって経済界の賛同を得たのをはじめ通産省，報道機関などの支援を背景にして，日科技連 QC リサーチグループのメンバーである大学，企業の有識者の方々のボランタリーな協力によって創設され，運営されてきました．石川 馨先生は，その一員として，デミング賞創設のための準備会合から参加され，ご逝去されるまで39年にわたってデミング賞委員会委員を務められ，デミング賞の名声を高め，権威を維持するために，常に指導的立場に立って産業界への品質管理の普及・推進ならびに審査制度の確立ならびに改善，審査委員の育成に努められるとともに，品質管理に関する優れた業績の企業の表彰に尽力してこられました．これは，日本の企業の品質管理のレベル向上に大きな効果をもたらすところとなっております．

日本の品質管理の水準は，日本品質管理賞，デミング賞実施賞，デミング賞事業所表彰の受賞会社によって高められて来たといっても良いでしょう．デミング賞制度が今日まで継続して社会的に高い評価を受けているのは，審査委員が研鑽に努め，その結果培われた審査スピリットと技術が継承されるとともに，若手委員の育成が図られてきたことにあるといえます．このような活動は，実施賞小委員会が中心になって進められてきました．この小委員会の委員長は，通産省工業技術院の院長にお願いすることになっておりますが，実質的な運営は，副委員長を中心として進めてきております．石川先生は，1951年創設以来1985年に70歳の実施賞小委員会委員を定年で退任されるまで，水野 滋先生（1951～82年），朝香鐵一先生（1951～84年），草場郁郎先生（1956～89年）とと

もに35年間にわたり務められ，この間小委員会副委員長を24年間(1962～1985)務められました．その間に，デミング賞実施賞中小企業賞(1958年)，デミング賞事業部賞(1966年)，デミング賞事業所表彰(1973年)および日本品質管理賞(1970年)が創設され，これらの賞の創設ならびにその後の実施運営に多大な貢献を果たされました．

また，これらの賞の実地調査はもとより，デミング賞委員会委員によるQC診断(1971年，創設)にも積極的に参加され，受審・受診会社のQC活動の調査を通じて，業績向上のための適切なアドバイスを審査意見書や診断報告書に書かれるとともに，審査委員に対しては調査にあたっての模範を示し，常にOJT教育を実施されました．同行した委員に対し，“審査でも診断でも会社のためになるようにやらなければいけない．良いことばかりを書くのではなくて，どうしたら会社が良くなるかを書かなければだめだ”とアドバイスされていました．

先生は，デミング賞の制度および審査運営等についても数々の提案や意見を出され，改善に貢献されました．また，審査委員の70歳定年制の導入(1980年)，実施賞審査チェックリストの改訂(1984年)を成し遂げられました．

また，日本経済の門戸開放の一環として，1981年，デミング賞制度を海外企業にも門戸を開く必要があるとの提案をされました．当初は，小委員会内部にも事務局にも消極的な意見が多く，結局石川先生の執念とでもいえる気迫におされて，小委員会の中に海外問題分科会が設置され，1984年には制度として規程化され，国際用ガイドの作成が始められました．

1989年にアメリカのフロリダ電力会社が海外企業で初めて，また，1991年には，台湾フィリップス会社が，デミング賞実施賞を受賞し，石川先生の夢が実現しました．余談になりますが，この海外で初めての歴史的審査を担当された委員から，この審査を通じて日本とアメリカの二つの国の文化の交流が立派に行われたことを先生の墓前に報告されたという後日談を聞いております．

なお，先生が実施賞小委員会を退かれる前に出された“企業へのQC指導について”(1985年)，“実施賞小委員会委員としての心構え”(1985年)は，先生の35年間にわたるデミング賞審査委員としてのご経験の結晶とも言うべきもので，今日でも，同小委員会の委員の重要な指針となっております．

先生は，実施賞小委員会副委員長に加えて，デミング賞本賞小委員会委員，制度小委員会委員，日経品質管理文献賞小委員会委員長を歴任され，デミング賞委員会全体の発展にも多大な貢献をして来られました．

なお，海外においても，デミング賞をモデルとした賞の創設が，静かなブームになりつつあります．その典型的なケースが，アメリカのマルコム・ボルドリッジ国家品質賞です．この賞の下院における審議は，1986年に始まり，ジュラン博士ならびにフロリダ電力会長(当時)ヒューディバーグ氏が公聴人として呼ばれました．両氏ともデミング賞の品質管理推進に果たす役割を強調し，アメリカにもデミング賞のような賞が必要であることを主張しました．その結果，1987年8月にこの法案は，下院を通過し，1988年から実施されるようになりました．なお，マルコム・ボルドリッジは1987年に急逝した商務長官の名前で，同氏が自由貿易の強い擁護者であったということで付けられました．

石川先生を偲びつつ

大　西　三　良

〔偉大なご功績〕

先生．日本は敗戦の苦悩と荒廃からよくも立ち直り，今日の経済大国まで成長してきたものですね．この奇蹟とも言うべき大発展は，先生が熱情を注ぎ込まれた品質管理が大きく寄与しているのです．1951年に初めてデミング賞が授与されて以来今日までデミング賞受賞会社(含む中小企業賞)は100余社の多きに達しましたが，これら会社の1988年度の売上げ合計は44兆円となり，その経常利益は遙かに2兆円を超す業績をあげております．この見事な成果は，若き日より多年にわたる先生の御努力が今ここに開花し結実してきたのであります．そのご功績は筆舌に尽くし難く，深い敬意と感謝を捧げる次第です．

〔新製品開発〕

新製品開発は，先生が最も注力された分野でした．わが社の世界に類例のな

い特殊ゴムZP(水素化ニトリルゴム)は先生の直接のご指導により生まれ完成したのです．この時私たちは，先生より源流管理を厳しく徹底的に教えられ，当社技術陣はTQCの真髄を学び得たと感動しております．このZPを中心としたわが社の特殊ゴムは，現在日・欧・米に生産工場を持ち世界のトップに立つことになりました．去る4月，私がこれらの工場を視察中英国にて先生の御訃報に接し，愕然としたのです．生みの親の先生を各地工場へご案内すべく描いていた私の夢は消し飛んでしまいました．呆然自失，合掌するのみでした．先生ほんとうに有難うございました．

〔想い出〕

先生．貴方への想いは尽きません．

“貴方が其処に居るだけで，皆んなが和んできたのです”

“貴方が其処に居るだけで，皆んなが弾んできたのです”

“貴方が其処に居るだけで，いろんな意見がとび出したのです”

貴方はそんな先生でしたのに…….

“最初からできんと言うんじゃない．どうやればできるか考えろ”私が大事にしている先生の教えです．

しかし，先生の温顔はもう見られない．貴方のあの独特なシャガレ声も聞かれない．しかし先生，貴方の思想は，貴方のQCは脈々として生き続けていくのです．どうか，安らかにお眠り下さい．

ほんとうに，ほんとうに有難うございました．　（日本ゼオン取締役会長）

「デミング賞はゴールじゃないぞ」

佐治敬三

わたくしどもの会社が TQC への取り組みを始めてまだ間もない 1985 年頃の，ある社長診断会でのことでした．「サントリーには，TQC で言う plan がないですね」PDCA のそもそものＰさえない，こう石川先生がおっしゃられた時には，これからいったいどうなることかと思ったものです．

と言いますのも，じつは 1950 年代の終わり，生産部門での科学的品質管理に本格的に取り組みはじめてしばらく経った頃，石川先生にご指導をお願いしたことがありました．しかし，わが社なりの QC をつくりあげたと判断して，門前の小僧ともいえない段階で，早々にご指導を離れてしまっていた，ということがあったのです．

1980 年代に入り，新たに TQC に取り組む決心をして，先生にご相談に伺ったところ，今回も快くお引き受け下さいました．そして活動を始めた矢先に，冒頭のお言葉です．耳の痛い思いでしたが，先生がそうおっしゃられたのは，“もういちど，基礎から訓練し直してやろう”というお気持ちからのことと，ひしひしと感じられました．

そして，忘れもしない 1987 年 12 月 16 日，石川先生は鐵先生とご一緒に，武蔵野ブルワリーを診断してくださったのです．デミング賞の受審にむけて準備を進めている最中でしたが，不安一杯のメンバーに「自信をもって頑張ってください」と，心強い励ましをいただきました．これが，わたくしどもにとっては，先生の最後の診断会となったのです．

翌 88 年に武蔵野ブルワリーは食品業界で初めて，デミング賞を頂戴することができ，先生にも喜んでいただけました．そして，先生に直接ご報告できなかったことが残念でなりませんが，90 年には，山梨ワイナリーも農業関係で初めて受賞することができました．

石川先生はつねづね「デミング賞はゴールじゃないぞ」とおっしゃっていました．わが社のTQCも，まだ道半ばだと思っております．今後も，先生から学んだことを，わたくしどもの活動の中で，いっそう発展させてまいりたいと存じます．

（サントリー取締役会長）

産業界のため，日本のため全力投球

相　馬　義　人

日科技連ビルが建った1960年の10月に連盟に入ったので28年余りになります．この間，石川先生には終始叱咤激励され，未だ多くの宿題を残しています．先生との出会いはDE(実験計画法)のセミナーの期間だったと思いますが，先生には3つの大きな思い出があります．

不況対策で新規事業の開発をしなければならなかった1966年に，職組長基礎コース(FBC)の開設を提案して採用され，石川先生に委員長をお願いしました．コースの企画についてご相談に伺った時，「職組長のための品質管理テキストを読んで勉強してこい」と一喝され冷汗を流しました．FBCは現在307回目を開催しています．

1972年5月に第7次QC視察チーム(7QCT)でアメリカに3週間同行しました．このチームは先生が団長で，プロダクトライアビリティを日本のQC界に持ち帰った意義深いミッションでした．帰国後メンバーが研究会を結成し，10回の会合をもち現在も情報交換を続けており，メンバーはそれぞれQC界で活躍している方々ばかりです．

デミング賞委員会の事務局を担当して9年間に「これからの日本のQCをどうもっていこうとしているのか」と繰り返し課題を投げかけられました．デミング賞実施賞の海外への門戸開放の実現は，石川先生の執念によるものでした．

先生は常に産業界のために，日本のためにをスタンドポイントに置かれ全力投球され，常にQCを志す人間には，現場の人間であれ，管理者であれ，経営者

であれ，学生であれ，わけへだてなくつきあわれ指導されました．また，勉強し教えを求める者に対しては，横綱のように相手の力量に合わせて胸を貸しておられました．先生のQCに対する情熱と愛情は，審査意見書やQC診断報告書の文字の端々に満ち溢れ，受審(診)された会社の人々に大いなる感動と勇気を与えたものと確信しています．　　(日本科学技術連盟第1事業部部長)

8.5　品質管理大会の発展にご尽力

今日，「品質管理大会」は，1年間の品質管理活動の総まとめとして，合わせて約4000人が参加するイベントとして，毎年11月に開催しております．

そのスタートは，「職場で取り組んだ品質管理活動の発表の場であり，相互の勉強の場」として企画され，1951年9月22日大阪商工会議所講堂において開催されました．わずか1日の会期でしたが，これが初めての「品質管理大会」となりました．　日本の復興と軌を一にした活動であり，今日の日本製品の品質を生み出す第一歩でもありました．

この大阪での反響を基に内容を整え，1952年から毎年11月に開催されることになり，その後設けられた品質月間の中心の行事として今日に継続されております．石川先生は第1回から第11回まで大会委員長として采配を振い，その後は品質月間委員長として，高所から，軌道作りに参画し続けてこられました．

この間，大会の名称は，1963年までは「品質管理大会」，1964年から「品質管理大会(スタッフ)」，1968年から「品質管理大会(スタッフ・部課長)」さらに1978年から「品質管理大会(部課長・スタッフ)」と変遷し，1991年から「部課長・スタッフ品質管理大会」(会期：3.5日間)となっております．

また，地方への品質管理の普及のため1957年から毎年5～6月ころ，春季品質管理大会(3日間)として，東京以外の主要都市において開催しております．

品質管理活動の広がりにともなって，1962年に「職組長品質管理大会」(1990年から「管理・監督者品質管理大会」・3日間)を，翌1963年に「トップマネジメント品質管理大会」(半日)を創設しております．さらに，サービス産業への品質管理が導入されることに伴い，1985年に「サービス産業品質管理大会」(2

日間)を開設し，今日に続いております．

ここ10数年間，大会のパターンは標準化されておりますが，始めから，大会実施のパターンがあって実施されたわけではなく，石川先生を頂点に，多くの方々の協力によって作られたものです．これらのルールは，石川先生が人の無限の可能性を信じ，先生の「出来ないと言わずに，どうしたら出来るか考えよ」，「実施して考える」，「自分で考え，改善したことは，みんなの前で発表したいものだ」という発想とブルドーザのような行動力によって，一つのものにまとめられ，できあがってきたものです．大会委員会のメンバーの方々の知恵と行動を引き出し，まとめるために，先生は単に優しさだけでなく，課題の割当，大会やその会合の日程など必要なことに関して，時には強引と思われるほどリーダーシップを発揮されてきました．会議には，「石川先生に言われたのではしょうがないな！」という，雰囲気，権威があったように感じます．「言ったことは必ず実践されたこと」，「決めた会合には必ず出席されたこと」の行動が基本にあり，自分に，メンバーに，社会に対する強い責任感と優しさを持って行動されておられました．

企業における改善活動の継続的な実践によって，品質管理活動のレベルは向上して行きますが，企業内の定型的な考え方・手法だけでは，どうしてもマンネリに陥りがちです．継続的実践のためにはどうしても外部からの刺激が重要です．また，一つの新しい手法が，普遍性をもった手法として定着するためには，どうしても多数の企業で試行され，磨かれていくことが必要であります．品質管理大会は，企業における改善活動の発表の場・意見交換の場を提供し，参加者に刺激を与えるとともに，多くの考え方・手法の発展に寄与してきました．さらに，この大会での発表論文は，全て『品質管理』誌の臨時増刊号として公刊されるようになっていますので，この大会に参加されなかった多くの人にも読まれるようになっており，大会の開催と相まって新しい考え方・手法の実践的適用の普及の効果を倍加させてきました．

例えば，1964年の松山大会での“管理点”についての発表やパネル討論は，その後の管理の考え方に多大の影響を与えました．また，1972年の福岡大会で三菱重工業㈱神戸造船所から発表された“品質表”についての発表は，その後，

多くの企業で取り入れられ，品質展開・品質機能展開として，今日，新製品開発にはなくてはならない技術となり，アメリカをはじめとして世界各国でQFD (Quality Function Deployment)として，普及するまでになっております．このようにして，これらの大会の定期的開催は，日本の全国的品質管理活動の特徴の一つとなっております．

また，臨時増刊号は品質管理研究者にとって，日本的品質管理についての研究をする時の重要な資料としても利用されてきております．

なお，先生がご存命であった1988年大会までに「部課長・スタッフ品質管理大会」で発表された論文数は4375件にのぼります．

（大窪昭夫，日本科学技術連盟第3事業部課長）

8.6　品質月間を創設

「安かろう，悪かろう」の代名詞と共に日本製品が輸出されていた時代に，広く社会の理解なくして，製品品質の向上を達成することはできないということから，「品質の重要性」を訴え，品質を意識していただく行事を作ろうという石川 馨先生のアイデアで，1960年に石川先生を委員長に，当時品質管理界で活躍していた産官学界の人を網羅し，品質月間委員会が設置されました．そして，その年の11月を「品質月間」と定め，スタートしました．

主催団体として，日本科学技術連盟，日本規格協会，日本商工会議所の3団体が運営を担当し，科学技術庁，経済企画庁，厚生省，農林水産省，通商産業省・工業技術院，運輸省，郵政省，東京都，日本生産性本部，日本能率協会，日本放送協会(後年参画：日本消費者協会，日本品質管理学会)の後援を得て広く日本全国に活動が展開されて行きました．

品質月間委員会の最初の仕事は，「品質月間」のシンボルとして「Q旗」を制定し，その販売，11地域での「地方講演会」の実施，「品質月間テキスト」の作成・販売，「品質月間ポスター」の作成，販売を決めたことであります．その後，「月間標語」の募集・作成・販売を加えて，今日の行事パターンができあがっております．

また，1969年から消費者にも品質問題や品質管理に関心を持ってもらおうという趣旨で消費者講座を設け，消費者団体や一般家庭の主婦を対象に無料の教育を行い，グループによる研究成果の発表会を行っています．この講座も先生の提言によるものです．

石川先生の，一人ひとりの知恵と行動を日本の復興・発展のために結集し，「この考え方を広げずにはおかない」という強い信念は，商工会議所記者倶楽部における，記者達への，先生自らの品質月間の訴えであり，協力の要請でありました．品質月間委員会においては，「輸出を経済発展のもととする日本にとって，品質問題は重要問題である」と見極め，常に品質をうたい，率先して啓蒙に務めてこられました．その間，先生の卓越した感覚は国際化，環境変化など，時の話題を組み込んで常に先駆けての行動であります．日本の復興はなににによって果たすかは，当時の人にとって，重要な問題だったと思いますが，「品質管理の考え方で品質をよくし，日本の発展を考えていた」と，われわれ日科技連職員は，常に先生から承っておりました．

リーダーとしての先生は「殻に閉じ込もらず，良いものはこだわりなく積極的に受け入れて活用する精神」でメンバーを引っ張り続けてこられました．この精神こそ，品質月間精神として，永続させるべき大切な行動基準と思っております．

なお，この品質月間制度は，アメリカをはじめとして，海外においても取り入れる国が現れてきております．石川 馨先生のアイデアが国際的にも認められるようになってきたのです．（第12章1節(4)参照）　　（大窪昭夫）

品質月間スタート時の思い出

森　　陽三

品質月間が始まった1960年当時は，商工会議所記者クラブの方々を同会議所に招き，品質月間についてのブリーフィングを行っておりました．このブリーフィングは簡単なおつまみと飲物を囲み，和やかな雰囲気で行われました．

この席には品質月間委員長である石川先生は必ず出席され，先生独特のスマイルで，「いやぁ，石川です」と，各紙の記者ひとりひとりにビールを注いで回っておられました．「無資源国日本にあっては貿易が大切であり，そのためには良い品質の製品を作って世界中に輸出し，世界中の人々に喜んでもらうことが大切である．それを実現するためにQC活動を行うのであり，QC活動を通して日本製品の品質向上を達成したい．ついては……」と，各紙の記者の方々の理解を求め，記者の人たちの意見を聞いては「ふん，ふん」と頷きながら，記事掲載をお願いしておられました．

酒は自主管理と言われていた先生が，記者の方々に「よろしく」という願いをこめて率先ビールをついで回られたばかりか，終わったあと，記者の方々をお見送りされておりました．

当時，東京商工会議所ビルには“国産品を愛用しましょう―国産品普及向上本部”という懸垂幕がかかっていた時代です．それから30年，“外国製品を買いましょう”というところまで発展した日本製品の「品質」と「信頼性」を思うにつけ，あの時の石川先生のお姿を思い出し，言うに言われぬ感慨にとらわれます．

石川先生の語録に「最初からできないと言うな．どうすればできるかを考えよ」があります．日科技連の職員なら一度は耳にしたはずの言葉ですが，先生ご自身が常にそれを実践されていたのだと思います．

（日本科学技術連盟第2事業部部長）

8.7 品質管理シンポジウムを盛り立てる

デミング賞創設15周年を記念して，品質管理国際会議を東京で1965年の秋に開催する案が日科技連から提唱され，その準備をかねた会合が1964年8月28日～30日(2泊3日)に箱根で，学界・官界・産業界の品質管理に関係のあるトップクラスの方々が一堂に会して意見交換がされました．この準備会合では，深夜まで意見の交換や交流が行われ，相互啓発の場となりました．残念ながら，1965年に計画された国際会議はいろいろの事情(第11章4節)で開催に至りませんでしたが，その準備会合が大変有益であったということで，水野 滋，朝香鐵一，石川 馨の3先生がQCS組織委員に就任され，1965年6月に，第1回品質管理シンポジウム(略称QCS)が箱根・ホテル小涌園で開催されました．石川先生が強くその開催を主張されたものと思われます．こんな事情から，1964年の会合は，俗称「第0回QCS」と言われております*．

第1回のテーマは「品質管理の導入・推進・定着」で，大学・官庁・産業界から計43名の参加がありました．この時の報文集の序文には3先生の連名で次のような開催の趣旨が記載されています．文面から当時の先生方のQCに対する情熱をうかがい知ることができます．

> 「……ところで裾野が広がる一方，山を高くする努力，すなわち品質管理の当面の問題点を実施面，手法面から掘り下げて，新しい方向に発展させるための努力は，残念ながら十分とはいえない．われわれがこのことに気づいて，品質管理の勉強を改めて行いたいと考えたとき，日科技連が多額の経費を支出して「品質管理シンポジウム」が開催されることになったことは，日本の品質管理界にひとつの強力な動力を与えるものとしてわれわれに大きな勇気を与えてくれた……」
>
> (原文のまま)．

以後，年2回開催ということで，既に53回(1991年12月現在)開催され，毎回活発な討論が展開されています．

---

* 草場郁郎(1964)「第1回品質管理シンポジウム」，『品質管理』Vol. 15, No. 10, p. 745; 今泉益正(1990)「第0回のQCS」「品質管理シンポジウム第50回記念史(25周年)」，p. 28参照．

石川先生は第1回～第24回(1977年)まで組織委員を務められ，以後は顧問としてご協力いただきました．この間，主担当組織委員を4回，発表を7回，また第1回～第46回まで一度も欠席されることなくすべて出席されました．過去数百人の参加者のうち毎回出席されたのは石川先生ただ一人でした．一度決めたことはよほどのことがないかぎり変更しない，決めた約束は必ず守るという先生の一面が如実に現れている結果といえましょう．

先生はまた「QCSは参加することに意義がある」ことを強調され，毎回のQCS招待者名簿と当日の出席者名簿とを対比され，招待しても欠席の人，遅れてきた人，途中で帰った人，急にキャンセルした人を細かくチェックされておりました．このQCSの石川メモは今も語り草となっており，事務局に保管されています．この点は現在も生かされ，招待しても3回連続して欠席した人は以後招待しないということが不文律となっています．

また，QCSでは昼間は発表と討論，夜は分科討論会のあと深夜まで一杯飲んで話し合うことが通例であり，その中心にはいつも石川先生がおられました．「QCの同志はこうしてでき上がった．今や世界に普及しているノムニケーションはこのQCSで誕生した」(杉本辰夫氏(第5章2節))と言われています．

当時のノムニケーション風景

このような雰囲気のもとで，運営されてきたQCSは，技術革新や諸々の環境変化に対する品質管理専門家，特に指導者層の間でのコンセンサス作りに計り知れない貢献をしてきました．良くアメリカには，偉大な品質管理の専門家はいるけれども，一匹狼が多く，共通のコンセプトに基づく品質システムがないと言われます．これは，QCSのような場がアメリカにはないことが大きく影響しているものと思われます．

もっとも，日本のTQCは，共通のコンセプトに立脚しているかもしれないけれど，その手順となると，明確に紙に書いたものになっていないので，技術移転がやりにくいと言われています．そこで，QCSでも，過去何回か，マニュアルあるいはガイドラインのようなものでもよいから，作ったらどうかという提案がありましたが，結局，アクションがとられないままで今日に至っております．石川先生は，この点に関して，「品質管理はマニュアル通りにうまく行くものではない，その背景は皆異なるのだから，その企業に合うように工夫しながらやるのがよいのだ，さもないと，形式的になってしまう」というお考えでした．従って，先生はマニュアル作りに関して消極的であり，このことが，ある程度ブレーキをかけてきたことは否めない事実であります．今後，国際化が進む中でどのような展開を今後遂げていくか，興味深い点であります．

そのQCSにおけるありし日の石川先生の写真を掲載して，先生を偲びます．

（三田征史，日本科学技術連盟第1事業部課長）

注）本節をまとめるに際して，名古屋工業大学名誉教授草場郁郎氏から，貴重なご意見を頂き，参考にさせて頂きました．

「貴様の先生」(QCSの思い出)

原田　明

石川先生が組織委員をしておられたころのQCS(品質管理シンポジウム)では,公式の討論が終わった後,先生の部屋で有志の論客が集まり,浴衣に着替えて寛ぎ,自由に幅広く討論するのが恒例になっていました.QCSは毎年2回開催され,今年で52回目を迎えますが今でもその伝統は受け継がれております.しかし,石川先生の部屋で打々発止と互いに顔を紅潮させて討論しあった,あの火の出るような熱気は遠のいたように思います.

品質管理に関係し,QCSやQCサークルの泊り込みのシンポジウムに参加した経験のある人々にとっては,石川先生の部屋での夜の自由討論会が,品質管理青春時代の一番懐かしく,また手応えのある思い出になっています.

最初のうちは,コップ酒を片手に皆の言いたい放題の議論をおとなしく,ふんふんと浴衣がけで聞いておられた先生が,「おい,貴様の意見は一寸おかしいぞ.もっと具体的に討論しよう」と言い出すと,先生は中途半端な妥協は決してしませんでした.いきなり浴衣の諸肌を脱いで裸になり,討論の熱気を燃え上がらせる雰囲気づくりの天才的才能を持っておられました.

QCのベテランにも若手にも,大学の先生にも,民間企業の人たちにも,それぞれ自分の思っていることを自由に言わせ,一方また石川先生ご自身も青年のように自説を頑張り通す稚気愛すべき雰囲気を持っておられました.私のように企業の出身で,大学での直接師弟関係のなかった部外者にも分け隔てなく接して下さり,実に公平な人間味のある先生でありました.

この自由討論は大抵,夜中の12時を大きく回り,私たちは自分の部屋に引き揚げて寝たくても,石川先生得意の「とことん討論」で帰るに帰れないことがしばしばでした.いま思えば,当時は先生にも私たちにも,徹夜に近い議論に耐えられるほどの若さが充分にあったということでしょう.いまでも突然,耳

元で石川先生のあの懐かしい嗄れ声の「貴様節」が聞こえてくるような気がいたします.

石川先生の素晴らしさは，その場その場で，何時も相手の目線に合わせて本気で議論して下さったことだと思います．何時も，相手の言うことを先ず信じてから議論しようとする「性善説」に立ち，温かい，時間を充分にかけた討論をしていただいたことが，ひとりQC界ばかりでなく，広い分野でのリーダーとして皆が喜んでついて行った理由だと思われます.

これから私たちは，石川先生がご健在ならきっとこうしたに違いないと勝手に判断して，皆で手分けをして，のびのびと日本のTQCを発展させる活動をしたいものです.

（オーケン取締役社長）

8.8 日本品質管理学会の創設・発展にご貢献

日本において品質管理の研究の中心となるべき学会の設立については早くからその必要性が認められていました．1958年の第1回QCチーム（日本生産性本部・山口団長）で石川先生は副団長で渡米されましたが，帰国後にまとめられた報告書の中で次のように提言しておられます.「アメリカにおけるアメリカ品質管理学会(ASQC)の活動，QCの普及力はめざましいものがある．わが国にも至急日本品質管理学会を設置すべきである.」

しかし，日本では日本科学技術連盟や日本規格協会が啓蒙普及活動を精力的に進めていた上に，研究もこれらの団体を根拠として進められたため，学会設立は切実な緊急の要請ではありませんでした．研究発表の場もこれらの団体の催す品質管理大会などでほぼその必要を満たしておりました.

ようやく1969年に至って機は熟し，第1回日本品質管理学会設立準備委員会が5月24日に開催されました．44名出席のもとに東京工業大学の水野先生が委員長となり設立の準備が進められることになりました．石川先生は設立委員の一人でありました.

翌1970年の2月7日に発起人49名が日科技連講堂に集まり設立発起人会をひらき，設立実行委員会を発足させました．18名の委員が選ばれ水野先生が委

員長，石川先生は副委員長となられました．この年の11月18日に創立総会が日比谷公会堂で開催されました．

あくる年の1971年4月24日に第1回総会が出席者383名(委任状含む)をもって開催され会則等を決定し，学会が正式に活動を開始する運びとなりました．

学会が設立されてから，先生は様々な面で重鎮の一人として学会の運営に関与されました．第1年度から第3年度(1971年4月～1974年9月)まで副会長を務め，第4年度(1974年10月～1975年9月)には会長になられました．評議員は第5，6，10，11の各年度に務めておられます．

1982年10月18日の第12回総会で朝香，木暮，水野，山口の各氏と共に名誉会員に推されています．

先生は第1回特別講演会(1972年4月22日)において「今後の品質管理のあり方」と題して，また第1回公開大学講座(1974年6月1日)では「激動のQC」という演題で講演を行っています．「第1回」となるとお鉢が回ってくるところがいかにも先生らしいところです．その後も第4回年次大会(1974年11月8日)では特別講演「激動期を品質管理で乗り切ろう」，第6回公開大学講座(1978年7月22日)では「海外における品質管理の動向」，第17回研究発表会(1980年4月25日)では特別発表「日本的品質管理(CWQC)は経営の1つの思想革命か？」というように品質管理の指導的な立場から学会員に対し示唆に富む講演を行い，学会員を励ましてこられました．　　(古谷真介)

日本品質管理学会「数ではないよ，質だよ」

今　井　兼一郎

石川 馨先生はTQC，QCの世界の四大教祖の一人として尊敬されていると，言う．TQCをManagement Toolとして実際にその有効性を証明された業績は，その故にこそ先生は一層高く評価されるべきであります．

日本のTQCは経済団体連合会，日本科学技術連盟を創設された，父君石川一郎氏との世界にも希な親子産学協力の見事な成果であります．

東京大学の応用化学教授としては全く異色で，現場の物造りの基本である品質に着眼され，工学として取り上げながら，その改善を実現する管理技術とし，さらには経営技術としてQCサークル，TQCへと発展させてゆかれました．

先生は私の東京高等学校の一年先輩，弟君の潔君とは同窓のこともあり，偉い先輩として，何と無く，お見知り頂いていたように思っています．

1976年にデミング賞実施賞事業部賞を石川島播磨重工業株式会社の航空宇宙事業本部が頂いた前後から一層ご指導を頂くようになりました．

日本品質管理学会で長期計画を立てたく，長老先生にご意見を承った際に，お体の様子で，かなり無理をして来て下さったように思えました．会員増強について御意見を述べられ，数ではないよ，質であると強く言い切られました．極めてはっきりと印象に残っています．

昨今米国で大学という教育機関のQualityが問題となり，それはManagementの対象となりうるはずである，としてTQM(日本のTQC)を教育の改善に持ち込もうとしています．しかも，国をあげて，米国の国際競争力の回復の決め手と考えているようです．日本でも，石川先生が試みられたと聞いて，改めて先生の先見の偉大さを偲んでいる次第であります．

(日本工業教育協会副会長，元石川島播磨重工業専務取締役，元日本品質管理学会会長)

8.9　石川先生と日科技連出版社／出版活動におけるご貢献

1946年5月日科技連創立と同時に出版活動は始まりました．しかし，本格的に活動がはじまったのは，1955年6月に連盟の編集・出版部門を分離独立させ日科技連出版社（当時の名称：JUSE出版社）が創立された以後ということがいえます．

出版社設立の趣意が，出版を通じて連盟諸事業の広報活動の一翼を担うということにありました関係で，当初の出版活動は，連盟機関紙『エンジニア・クラブ』（現在の『ENGINEERS』）の編集，各種セミナーテキスト・資料類等の制作が中心で，書籍の新刊は年間7～8点にとどまっておりました．一方，『品質管理』誌など雑誌部門は各種委員会の運営から制作・販売まで，連盟時代の業務をそのまま継承した形で行い，QCサークルに関する諸事業についても，『品質管理』誌に掲載された座談会が契機となって編集委員会がイニシアチブを取ってスタートしたという関係もあって，『現場とQC』誌，（現在の『QCサークル』誌）の編集を始めとして全ての業務を出版社が担当しておりました．1965年に入って連盟の組織整備もすすみ，また出版社もひとりだちすべきということがあって，書籍の出版以外の事業は販売面を残し徐々に連盟に返還されることになりました．この間における出版社と先生の関係は単に出版事業に協力する外部の指導者という関係をはるかに超え出版社の身内という存在でありました．

「コンスタントに売れる本を作れ」「それが日本の企業の発展に繋ることなんだ……」が先生の口ぐせでした．

東大退官と同時に出版社の非常勤取締役に就任され，亡くなられるまで経営全般についてもいろいろご指導をいただきました．　（新井勝治）

『品質管理入門』の思い出

新井勝治

石川先生の代表的な著作『品質管理入門』は1954年5月15日初版発行で，わずか本文109頁，定価180円の小冊子でした．ただ当時は品質管理関係のまとまった本が少なく，多くの人たちがこの本で勉強したものです．

この出版の編集担当者に新参の私を選び，先生に引き合わせてくれたのが小柳賢一日科技連専務理事(1965年1月死去)でした．

当時，先生はまだ東京大学の助教授時代でお年も30代後半と若く，私どもからみて鬼のような存在だった小柳さんが，口角泡を飛ばしてQC論議を吹っ掛けても悠然と反論されている先生のお姿をみて頼もしく思い，また怖いもの知らずの青年将校といった印象を受けたものでした．

この出版はQCテキスト・シリーズの一冊として企画されたもので，その後，朝香先生の『抜取検査入門』などが出版され，各方面で教育用のテキストとして重宝され，QCの啓蒙・普及に大きな役割を果たしました．

本書はその後『品質管理とは』(1960)『新編品質管理入門(A)』(1964)『新編品質管理入門(B)』(1966)と読みつがれどういうめぐり合せか三度目の改訂版を出すときには，今度は編集の責任者としてまた関係することになりました．初版の4倍近い424頁という大著『第3版品質管理入門』が発行されたのは1989年の1月31日のことでした．

1988年の暮に東大の久米均先生とご一緒に入院先の聖路加国際病院に伺ったおり，「1月23日にホテルオークラで行われる叙勲パーティーの記念品としたいのでその数だけ何とかならないか」というお話があって，急拠校正作業を短縮し，先生のサイン入りの特別限定版をご要望通り間に合わせることができ，面目をほどこすことができました．

今，先生の死去により二度と改訂されないこの本のことを考えると，数々の

思い出が脳裏を通り過ぎるなかで，三十余年前初めてお会いしたころのお姿が彷彿と蘇り，終世忘れられない人となってしまいました．

（日科技連出版社取締役編集部長）

人を信じて任せる

仁尾一義

先生方には失礼な話ですが，雑誌の編集委員といっても必ずしも文章を得意とされる方ばかりではありません．したがって編集者としては，普段から「書ける人」を探し，そんな人が見つかれば，その人に原稿依頼が集中することになりがちです．

昭和40年代，私が雑誌『現場とQC』の担当者の頃です．あるとき編集委員長である石川先生からお小言をいただきました．「貴様は雑誌のこと，それも目先の号のことしか考えていない．編集者として失格である」と．優れた原稿の書ける人はどの分野でも貴重ではないか，そんな人に頼むことのどこが悪いのかというのが私の本音でピンときませんでした．

「日本のQCをどうすればよいかという立場から考えてみよ．QCサークルはこれから大きく伸びていく．世話人をもっともっと養成しなければならない．少しでも多くの人にチャンスを与えるのが編集者の仕事である．近視眼的に編集するのでなく，“人を育てる”つもりでとりくまないといけない」と．

「人を育てる」という発想は二十代の私にはありませんでした．人を育てられるほど立派な編集者であるとも思ってもいませんでした．しぶしぶ先生の言に従ったというのが本当のところです．しかし，2年，3年経ってみると，執筆者としては敬遠していた人が，素晴らしいQCサークルの推進者として，また立派な執筆者として育たれたのです．

お弟子さんといえば先生の研究室を卒業した人を指すのが一般です．しかし，石川先生には研究室に関係なく弟子と称する人が多くいます．それは先生がQC

の普及啓蒙活動のなかで「人を信じ，多くの人にチャンスを与えてこられた」からに違いありません．人は「チャンスを与えられ，任されると立派にやり遂げる」というのは先生の信念だったようです．

しくじりを繰り返しつつも多くのチャンスを与えていただいた私も，実は密かに「自称弟子」の一人のつもりです．　（日科技連出版社特業部次長）

8.10　石川先生と品質保証活動

原子力発電所品質保証検討委員会について

井　上　邦　夫

1979年3月28日に発生したアメリカ・スリーマイル島原子力発電所事故は我が国の原子力関係者に強い衝撃を与えました．その上，我が国の原子力発電所においても，その後，いくつかの事故が発生しました．それらの原因調査の結果，原子力発電所の品質管理に不十分な点が見出されました．そこで通産省としては，国内の原子力発電所の品質保証水準の向上を図る必要を認め，原子力発電所品質保証検討委員会を設け検討することにしました．

本委員会は，電力会社，重電メーカからのメンバーに学識経験者を加えて構成され，委員長は石川 馨先生にお願いしました．本委員会は，1980年1月に発足し，1981年9月に報告書が出されました．この間1981年2月には欧米諸国の実態調査も実施しました．

委員会では，事故・故障の分析を行うとともに，産業界における品質保証活動の実態を

① 重電メーカ等におけるプラント構成要素の製作段階

② 原子力発電所の建設現場における建屋の建設，プラントの設置段階

③ 原子力発電所完成後の運転段階

のそれぞれについて調査し，これを踏まえて品質保証のあり方について検討を

行いました．

その結果，原子力発電所の品質保証については基本的には適切な対応がなされているものの，より完璧を期すため，企業の経営者・管理者を含む体制の確立等の組織面の強化，外注管理，教育訓練等の個別品質保証活動についての改善策を提言しました．

この提言の結果，原子力発電所に係わる品質保証について，電力業界，重電機メーカ等において，業界のトップをはじめとして関係者の意識の向上，個別の品質保証活動の改善が図られるとともに，これを契機に，品質保証部門の格上げなどが図られ，TQC の本格的な取り組みを始める企業も現れるなど，その後の原子力発電関連業界の品質保証向上に多大のインパクトを与えました．

この委員会が設置されるまで，原子力発電所の安全性，信頼性等の問題は，原子力関係の産業界，学識経験者が中心になって検討されていましたが，いくつかの事故・故障における品質管理上の問題について検討を進めるにつれて，これは，原子力固有の問題というよりも，むしろ一般的な品質管理の問題と考えた方が良いのではないかという認識が，通産省に生まれてきました．そういうことで，委員長を品質管理界の権威でいらっしゃる石川先生にお願いすることになりました．先生ご自身も，同様の考え方をお持ちだったようで，原子力分野に品質保証の考え方を導入することについて強い意欲をお示しになりました．

石川先生は，品質保証分野の学識経験者として，真壁 肇先生，久米 均先生をご紹介くださった他，自ら福島の原子力発電所の調査に行かれるなど，積極的に取り組んでいただき，TQC の考え方，品質保証に取り組む姿勢など，原子力発電の関係者に多大な影響を与えられました．

（当時 通産省資源エネルギー庁　公益事業部原子力発電課原子力発電専門職，
現 通商産業省工業技術院　標準部国際規格室調整官）

石川先生と信頼性

塩　見　　弘

私事にわたりますが，私が電気試験所に入所しました1952年から，米国は有名なAGREE(Advisory Group on Reliability of Electronic Equipment)が研究を始めました．Weibullの論文は1951年に発表され，当時Cornell大学にいたKao教授らがこれを発展させてWeibull確率紙の研究を始めていました．私は電気学会の高信頼管試験法分科会などに関係していましたが，統計的方法を勉強するため，同じ研究所にいた吉川英夫さんの紹介で第14回品質管理セミナー・ベーシックコースの書記(1957年)をさせて頂くことになり，これがきっかけで日科技連に関係するようになりました．その後，統計的方法部会や石川先生が部会長をされていたサンプリング部会で勉強させていただき，信頼性関係の論文を紹介しました．当時はガリ版の資料でした．

1958年に石川先生が調査団で渡米されたおみやげに，出版されたばかりのAGREE報告(1957年6月)を持ち帰られ，「君，勉強してみてくれ」と手渡されました．オレンジ色の3 cmほどの厚い資料でした．私の記憶では夏に入る前で，蚊帳をつって，さっそく抄訳にとりかかりました．この報告書は信頼性のバイブルとも言われるようになったもので，そこに述べられている体系的な信頼性工学の考え方は，私にとって，まさしく目を見張らせるものであり，抄訳［その1］を1959年1月に石川部会資料No. 59-3として，ひきつづいて，［その2］を石川部会資料No. 59-4として，サンプリング部会で発表しました

一方，日科技連信頼性研究会(T委員会)は高木昇先生が委員長，唐津一先生が幹事で1958年9月に第1回の会合を開いています．私が初めて出席したのは，第4回(1959年1月)であったと思います．第5回(1959年2月)に上記資料をT委員会に提出して説明しました(第7回，1959年5月，T委員会資料No. 7としてまとめました．)

石川先生が信頼性の先駆者として活躍された事例を次に箇条書きに示します．

1）信頼性研究会の成果をもとに日本で初めて開いた日科技連第1回工業生産における信頼性短期セミナー(1960年9月)の講師として，“品質管理と信頼性”を担当されています．それ以降も引き続いてお話し頂きました．

2）中部地区で初の中部産業連盟の「工業生産における設計と信頼性セミナー」(1964年1月)で，“品質管理と信頼性問題”という題目で講義を担当されました．

3）1962年からT委員会で検討を始めてまとめました信頼性用語(21用語)を先生のご尽力で1963年に「JIS Z 8101 品質管理用語」の参考として巻末に掲載することが出来，その後，「JIS Z 8115 信頼性用語」(1970年制定，1981年改訂)の原案作成に専門委員のお一人として参加して頂きました．「なるべく日本語を使え」という忠告をいただきましたことを良く覚えております．

4）1967年第7回日科技連品質管理シンポジウムにおいて，主担当組織委員として“品質保証と信頼性”を取り上げられました．

5）日科技連信頼性シンポジウム(その後第4回 1974年，信頼性・保全性シンポジウムと改称)組織委員会副委員長を第1回が開かれた1971年からつとめられてきました．

6）1970年には，『品質管理』誌の連載講座として“信頼性”を取り上げられ，この連載原稿を編者としてまとめられて1971年に『企業における信頼性活動』として出版されました．

7）父君にちなんで設定(1970年)された石川賞(委員長　高木先生)の委員として「経営の近代化また製品・サービスの品質向上」に力をそそがれました(亡くなられてからは石川 潔氏があとをつがれています)．

石川先生の先見性のある広い視野と包容力，実行力のあるお人柄が日本の品質管理と信頼性の結びつきと発展に大きな力となったということを，あらためて感じているところです．

（中央大学教授　理工学部管理工学科）